パリ通信

ラスパイユのスツディオより

中内敏夫

1

わたくしは、日本教育史を勉強している。それが、なぜフランスへ？

フィリップ・アリエスの『アンシァン・レジーム下のフランスの子どもと家族』初版本が一九六〇年にでたとき、わたくしは、これだこれだと思った。この好著を最初に手にいれて、わたくしたちの仲間に紹介したのは、いまは山形大学にいる為本六花治教授である。まもなく、今回、わたくしにアンビタシオンを書いてくれたG・スニデール教授の「十七、八世紀フランスの教育学」もでて、教育史研究の新しい方法論を模索していたわたくしたち当時の青年研究者はこおどりし、こんなのがあるゾといったことを新聞のコラム欄にのせて、その動向をふいちょうしたりしたものである。

しかし、子ども、学校、家族の三部からなるアリエスのこの著書の方法論がどのような来歴をもってここに採用されたものであるかといったことについては、当時のわたくしたちには皆目、けんとうがつかなかった。わたくしたち

にとっては、この大冊の内容よりも、それを導いた方法論の方が関心のまとだった。わたくしたちの仲間には、フランス史の専門家もいたが、ほかにアメリカ史もいたし、わたくしは日本教育史をやろうとしていたからだ。もっとも、わたくしは、そのまえに、日本教育史らしいものを共著でだしていた。この小著は幸い好評で、高校生の読者から感想文をもらったりしたが、学会では全くおはなしにならなかった。わたくしは深く反省し、このうえは、方法論をはっきり明示し、理解をえようと思うようになっていた。

アリエスってどういう人？　フランスから帰ったばかりのひとにたずねてみる。いや、ききませんね、おそらくアマチュアでしょう。といったぐあいの状態がつづいた。ところが、そのご、アリエス教授がアメリカにまねかれ、アメリカで知られ、英訳書がでるようになると、日本でも、アリエス・ブームがおこりはじめた。アリエスが自分と同じ分野をひらいた人としているドイツのエリアス教授の著作はひとあし先に日本で翻訳がでていたが、アリエスのこの大冊も近く邦訳がでるはこびになったときく。

しかし、アリエス・ブームがおこっても、その育った方法論の系譜は、依然としてわたくしたちにはよくわからなかった。フランスへ自分でいってみよう！　そうわたくしは考えるようになった。しかし、ビジターとしてならともかく、研究者にとってのフランスはとても遠かった。雑誌『思想』が〈社会史〉の特集をして、その方法論の周辺を、社会史（Histoire sociale）、歴史人口学（Démographie historique）といったかたちで一般の人びとにもわかりやすいように紹介したのは、最初の出会いから約二〇年後、わたくしがパリへむけて出発した翌月のことだった。

2

Démographie historique って、なに？ Démographie と Histoire（歴史学）をいっしょにしたものさ。ワカッタ。じゃあ、Démographie は？ Demos（民衆）の Graphie（誌、書記法）のことサ。だからまあ、万人の日常生活史ということになるかナ。

社会科学高等研究院（H.E.E.S.S.）でのアリエスのゼミナール（テーマは「性の歴史」）にでたり、デモグラフィーの本陣である国立人口問題研究所（I.N.E.D.）に出入りし

て、まず、新一年生としての耳学問をはじめる。

歴史学の歴史は大へんふるい。しかし、デモグラフィーはずっと新しい。といっても、出発は、一七世紀。一九世紀になると、デモグラフィーということばをタイトルに使った書物があらわれてくる。この関係から考えていくと、まず歴史学があり、これが新進（?）のデモグラフィーなる学問に出会う。その交叉しえた部分に生まれたのが、デモグラフィー・イストリークということになるだろう。それで、歴史学はこのときどう性格を変えたのだろうか？　デモスの記録とはなにをいうのだろうか？　そういった素朴なところから少しずつ考えてゆく。

一六六二年にでたその最初の文献からしらべてゆく。一八世紀にかけて、J. Graunt、W. Petty、W. Kersseboom J.P. Süssmilch、A. Deparcieux といった初期デモグラーフのしごとがならぶ。つづいて、一九世紀の本格的成立期を形成する A. Guillard や E. Levasseur らの基本文献。それから、今世紀三〇年代のM・ブロック、L・フェーブルら「アナール」学派の旗上げと実証主義批判の系譜もたどっておかねば。そのうえに、第二次大戦後の歴史人口学、社会史、さらにはアリエスらのマンタリテ史の次元が姿をあらわしてくる。

時代、領域、それに研究者のイデオロギー、研究歴や個性によって、そこには微妙なちがいがあり、これらの文献をひとくくりにすることはできない。しかし、そこに一貫したものがあることも事実だ。――自然のなかから、一定の社会関係のもとにこの世に誕生し、社会をつくりまたはつくりかえ、そして死んでゆく（自然に回帰してゆく）それぞれの時代、それぞれの地域の無名の人間たちの日常生活の記録の復原と性格づけという志向とでもいえばよいか。もちろん、育児や学校での教師たちのしごとも、人の一生の大切な節々をなすもののひとつとしてとりあげられはする。しかし、その育児史は学校教育史は、政策史や制度史、大事件、そして大人物史の次元ではなく、文字通りのデモスの日常のしごとの次元でとりあげられ、復元され、分析され、性格づけられる。

しかし、それにしても、このような次元で《過去というメガネをかけて未来を垣間みる》――それが歴史家の固有のしごとなのだが――しごとのあまりの特異さには、ときにはどぎもをぬかれてしまう。そこでは、夫婦愛に同性愛、プロスティチュートに男妾といった性愛と結婚の諸形

態から、にんしん、ぶんべん、ひにんにだたい、育児、捨て子、えい児殺し、それから通学と識字率といった出産と育児と教育の問題。それに日々の労働のあり方ときき、きが、えき病、戦争そして死と埋葬の諸形式といった、まずは従来の歴史学では正面からとりあげられることのなかった過去の人間生活の断面が次々とひきあげられてくる。その忘れられ、記録されないまま埋めこまれていった様相が再現される。

な、な、な、なんと、こんなのが「教育史」だって？

なるほど、そこでは、大政治家がどういう教育政策を発案したとか、大教育家がどう努力したとかいった、従来の実証史学がとりあつかってきた問題は正面からはとりあげられない。次元がちがうんだから時代区分も全くちがってくるし、史料論もちがってくるというわけだ。この種の問題は「教育」の問題ではないかもしれない。しかし、人がうまれて死ぬまでのこの過程は、人間の発達の重要な節のひとつひとつではないか。そしてもし、教育問題の中心課題が発達課題とその克服問題であるとするなら、この種の諸事実の過去における形態の復原を主要課題とする歴史学もまたひとつの教育史学のあり方を示すものといえるのではないか。そして、そういう次元から、「大政治家」や「大教育家」の果した役割をみなおしてみることも可能ではないか。

そんなことを毎日考える。

3

ここ、ラスパイユの大通りに面するスツディオに居をかまえて書生ぐらしをはじめて、そろそろ一年になる。

パリにくらして一番きれいだと思うのは、空である。空というよりも、パリの空の雲である。美しいというのは、どうも気になってついそこへ目がいってしまうという意味だ。

黒い雲。ピンク色に染った雲。灰色の重くたれこめた雲。それから、どうだいといったぐあいの白いやつ。いろいろ姿をあらわすが、どれもいい。みあげ、ながめているだけでは満足できなくなって、手に触れてみたくなる。しかし、この雲は、一瞬後には、姿をかえてしまってもうあとかたもない。

歩いている人たちも老若、男女をとわずきれいだし、町

並もいい。大分すくなくなったが、一七世紀、一八世紀ごろにできた、何回も何回も修復され、うすよごれた建物がいい。いまでもそこに人がくらし、人口の生活が息づいている。しかしこの町並は、エトランジェの目には、いかにもこれみよがしにつっぱっているところがあって、どうも肩がこる。パリは人類がつくった都市のけっ作であり、人工の極致だと人はいう。それでいてこうなのは、人工というものは本質的にこういうものなのか。ルーブル、オペラ座、凱旋門、サクレ・クール、ノートル・ダム、コンコルドといった、おきまりの立派なものであればあるほど、横光利一ではないが、相手の下心がみえてよくない。

しかし、一寸見方をかえてみる。すると、この人工の世界が突如ちがった空間をわたくしたちエトランジェにもみせてくれる。

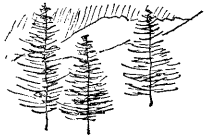
パリの石畳の道の両側を、朝と夕には、水が流れる。そうすると、この大都市に村の香がただよいはじめる。一分のすきもないかのようにぬりこめられ、たたみあげられている果てしないこの建物の通りに面した重い門のひとつを一寸くぐってみる。するとそこはもう村だ。たんねんに植えこまれた樹々のつくる緑の空間、うそのような静寂。そして子どもの声。老人のつぶやき。

火曜と土曜には、すぐ横をはしるエドガー・キネ通りに市がたつ。野いちごの山が目にとまって足をとめる。すると、ムッシューと女の子の声。まだ生きていて動きをやめないカニやエビ。たちどまる。すると、またもやムッシュと男の子の声。親といっしょに働いている小さな子どもたちがパリにはいる。

都市から無用なものを排除し、都市をつかって国民生活の収奪をはかる独占資本によってすみっこにおいやられながらも、パリはまだこういう空間をもっている。こういう空間をつくりえているということ自体が、この社会のブルジュワ性の現われなのか、それとも、ブルジュワ社会の論理とたたかう力の定着の証明なのか。わたくしにはまだわからない。いずれにしても、このようなひとびとのくらしを、その深層においてとらえきる方法をマスターしたいと、願う。

パリへやってきて一週間たつかたたないかのころだったと思う。周郷博先生がいまパリについたところだがと電話してこられた。周郷先生はお茶の水女子大学附属幼稚園長をされたこともある方で、大学では、わたくしの大先輩だ

った。退官されてからは丹沢のふもとに土地をかりてお百姓をなさっていた。わたくしがいよいよパリへたつという十日ほどまえに先生のところへあいさつにゆくと、先生は、これから冬の日ざしにむかって育ってゆくキャベツの苗の手入れをなさっていた。その根元にクワをいれながら、なかうち君、これがほんとうの地下工作というものだネとおっしゃった。先生お手製の〝農薬〟ぬきの野菜をごちそうになり、パリへいってたよる人がいなかったらたずねてみなさいとフランス人、ドイツ人、何人かの方を教えてもらって帰ってきた。その先生がまだ二週間一寸しかたってないのにわざわざパリまでいらっしゃって会いたいとおっしゃる。お会いすると、なにかことづけはないかねとおっしゃって、これにはさすがにおかしいことに気付いて、まだないわね、とつぶやかれた。



知り合いの幼稚園の先生にひっぱられてやってきたんだ、とおっしゃっていた。しかし、わたくしにはお別れにみえたような気がして、とてもありがたく思いながら、いやだった。それからしばらくして、先生は日本で亡くなられた。

帰国しても、もう先生はいらっしゃらないのだと思うと、喪家の犬のごとしで、足どりも重くなる。しかしわたくしは日本へ帰らなければならない。帰って、先生の教えてくださった、これが地下工作だというものをうけつがなければならない。（一九八〇・七・五）

（お茶の水女子大学）